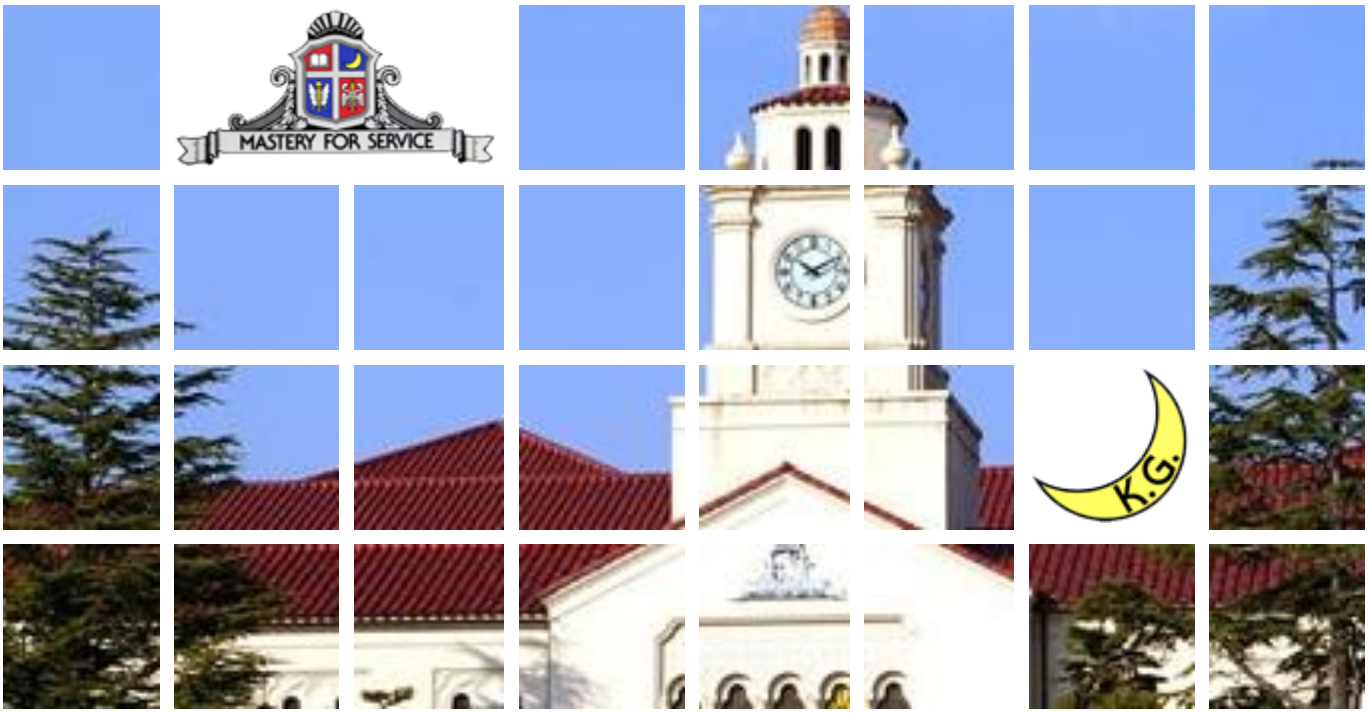
AIESEC

The international platform for young people to discover and develop their potential

AIESEC in Japan
Kwansei Gakuin University Local Committee
Annual Report 2007/2008

Table of Contents



2 … アイセック団体概要
4 … 委員会理事挨拶
5 … 平成19年度委員長挨拶
6 … 平成20年度委員長挨拶
7 … 平成19年度活動概要
8 … 海外研修生受入事業活動報告
インターンシップ受け入れ実例
9 … ①Kazi Asifuzzaman（バングラデシュ）
11 … ②浩 洪（中国）
12 … ③Paul Bryson（オーストラリア）
14 … 海外研修生送出事業活動報告
インターンシップ受け入れ実例
15 … ①石井恵士（フィンランド）
17 … ②坂野晶（フィリピン）
19 … 平成19年度決算報告
21 … 平成19年度賛助企業一覧
22 … アイセック関西学院大学委員会

アイセック団体概要

✓アイセックとは

アイセックは、世界100以上の国と地域にグローバルネットワークを持ち、海外インターンシップ事業を通して、次世代の国際社会を担う学生が自己の可能性を発見し発展させるプラットフォーム（場）です。アイセックは海外インターンシップを運営して3500人以上の学生に海外で生活し働く機会を提供しているだけでなく、さらに国内外で350の会議を運営し、5000人以上のメンバーに組織を運営して自らリーダーシップを発揮する機会を与えています。

✓世界最大規模の学生NPO

現在は世界100以上の国と地域にまたがり、800大学以上に委員会を持ち、約18,000人の学生が活動を行う世界最大規模の学生組織です。日本国内においても、全国の主要な24の大学に置かれた委員会で1000名近くの学生が活動を行っています。

✓50年以上一貫してインターンシップを運営

アイセックは1948年の設立以来、一貫して海外インターンシップ事業を行い「インターンシップ」と「国際理解」の経験を通じ、国際社会を舞台に活躍しえる若者を育成しております。現在では年間3500人程度の学生を交換し、継続的に次代のリーダーを輩出し続けています。

National Network – 24 Local Committees

【関東地区】
東京大学委員会
一橋大学委員会
早稲田大学委員会
慶應義塾大学委員会
上智大学委員会
青山学院大学委員会
立教大学委員会
中央大学委員会
慶應湘南藤沢委員会
明治大学委員会
【中部地区】
名古屋大学委員会
南山大学委員会
名古屋市立大学委員会
【関西･中国地区】
滋賀大学委員会
京都大学委員会
同志社大学委員会
大阪大学委員会
大阪市立大学委員会
神戸大学委員会
関西学院大学委員会
広島委員会
【北海道地区】
北海道委員会
【東北地区】
仙台委員会
【九州地区】
福岡委員会

Global Network – More than 100 Countries and Regions

オランダ
ドイツ
ベルギー
イギリス
ノルウェー
デンマーク
ハンガリー
ルーマニア
ロシア
ウクライナ
ラトビア
ユーゴスラビア
クロアチア
トルコ フランス
オランダ
ポルトガル
スウェーデン
ポーランド
チェコ
アイルランド
カザフスタン
アルメニア
リトアニア
スロベニア
ボスニアヘルツェゴビナ
マルタ イタリア
スペイン
フィンランド
スイス
オーストリア
スロバキア
アイスランド
ベラルーシ
エストニア
ブルガリア
マケドニア
ギリシア
ガーナ
セネガル
エジプト
ナイジェリア
ボツワナ
ウガンダ ケニア
モザンビーク
タンザニア
カメルーン
チュニジア
リベリア
南アフリカ共和国
トーゴ
コートジボアール
ジンバブエ
モロッコ
日本
香港(地域)
タイ
インドネシア
スリランカ
バングラデシュ
韓国
台湾(地域)
マレーシア
オーストラリア
インド
中国
フィリピン
シンガポール
ニュージーランド
パキスタン
アラブ首長国連邦
アフガニスタン
カナダ
アルゼンチン
コロンビア
エクアドル
パナマ
ウルグアイ
アメリカ合衆国
ブラジル
コスタリカ
グアテマラ
ペルー
ベネズエラ
メキシコ
チリ
ドミニカ共和国
エルサルバドル
プエルトリコ
ボリビア

団体名： 特定非営利活動法人
アイセック・ジャパン
（英名：AIESEC in Japan）
設立： 1962年
所在地： 〒102-0071
東京都千代田区富士見2-15-5
ベルベデーレ九段206

アイセック団体概要

団体理念（Mission Statement）

■ What is AIESEC（アイセックとは）

AIESEC is a global, non-political, independent, not-for-profit organization run by students and recent graduates of institutions of higher education. Its members are interested in world issues, leadership and management. AIESEC does not discriminate on the basis of race, color, gender, sexual orientation, creed, religion, national, ethnic or social origin.

アイセックは、その活躍の場を国際社会とし、いかなる政治思想からも自由で、独立した非営利組織であり、大学生を中心とする若者によって運営されている。我々は、国際問題・リーダーシップ・マネージメントに興味を持つ学生によって組織されており、人種や肌の色・性別・性的嗜好・信条・宗教・国・民族や社会的地位などから差別することはない。

■ What we envision（アイセックが目指すもの）

Peace and Fulfillment of Humankind's Potential.

平和で人々の可能性が最大限発揮される社会の実現。

■ Our impact（アイセックがもたらすもの）

Our international platform enables young people to discover and develop their potential to provide leadership for a positive impact on society.

我々の持つ国際的なプラットフォームによって、若者は、社会にポジティブな影響を与える為のリーダーシップを発揮する可能性を拓いていく。

■ The Way We Do it（アイセックの活動方針）

AIESEC provides its members with an integrated development experience comprised of leadership opportunities, international internships and participation in a global learning environment.

アイセックは、そのメンバーに対して、リーダーシップ経験・海外インターンシップ・国際的な学びの環境を通して統合された成長機会を提供していく。

■ Values（アイセックの重んじるもの）

1. Demonstrating Integrity （自身の行動によって生じる全ての責任を、最後まで果たします）
2. Activating Leadership （常に主体性を発揮することで、新たな道を切り拓いていきます）
3. Striving for Excellence （現状不満足を是とし、常に比類なき価値の創造を志向します）
4. Enjoying Participation （情熱を持ち果敢に挑戦することを以って、至上の喜びとします）
5. Living Diversity （寛容な心で差異を認め合い、そこから新たな価値を見出します）
6. Acting Sustainably （次代へ繋ぐことを忘れず、持続的な価値を発信し続けます）

委員会理事挨拶

関西学院大学
商学部教授
藤沢武史

今年もアイセック関西学院大学委員会に多くの新入生を迎え、理事としてOBとして嬉しい限りです。

関西学院大学のスクールモットー“Mastery for Service”を具現化できるという点で、アイセックほど特異性を発揮できるクラブやサークルは学内にないと自負しています。新人アイセッカーには是非４年間かけて国際感覚とボランティア精神を身に付けていただきたいです。

アイセックの創設時からの最大目標である海外企業研修応募者の研修受入れ先とのマッチング、受入れ時の手続き、在日中のお世話に、ここ数年来、関学大アイセックは一番力を入れてきているように見受けられます。逆に、多くの当委員会のメンバーが外国企業からも研修生として迎えていただけるよう願っています。

研修生を受け入れてくださった会社の経営者や研修担当者や関係部署の方々、あるいは機関の代表者には、心より厚く御礼申し上げます。

当委員会との絆をいっそう強固なものにしていただければ幸いです。

私がアイセックと関係をもつようになったのは、関西学院大学に着任するまえの東京大学の研究室に助教授として勤務していたときに、上司の安井教授（国連大学副学長）が、東京大学のアイセックの理事をされており、その関係で、海外からのアイセックを通じた研修生が研究室に出入りをしていました。インドやハンガリーなど、いろいろな国からの学生を受け入れました。なかでもインドのムンバイのアイセックの代表をしていたAbhishek氏は、私の英語の論文の修正を手伝ってくれ、それがきっかけとなって翻訳の会社*を 設立するまでにいたりました。

関西学院大学に着任して、ゼミに関連をもっていた学生の紹介で、アイセックの理事をつとめさせていただくことになりました。

日本は、世界との関係を抜きにして語れません。企業もグローバルに展開することが期待されています。アイセックでの経験が皆様の将来にきっと役に立つ来る日があると信じています。がんばってください。

*翻訳会社
http://www.editage.com

関西学院大学
総合政策学部教授
松村寛一郎

平成19年度委員会委員長挨拶

関西学院大学

商学部　3年

中西 和博

平素は当委員会の活動に格別のご理解およびご高配を賜り、誠に有難うございます。

「新しいことにチャレンジし、『成果』への土台作りを成した1年間」

2007年度の当委員会の活動を上記のように総括します。

数年前まで主幹事業である「海外インターンシップ」を年間合計で1件運営するだけでも手一杯であった当委員会も、地道に骨組みを作ってきた末にようやく体力をつけました。そうした歴史を経て、2007年度は新たに2つの注力分野に取り組みました。

1つ目は組織内部の「人材」の取り組み、取り分けRecruiting活動です。獲得したい人材像を設定し、その人材を獲得するためのマーケティング活動を行なうなどの入念なプランニングを行なった結果、例年を多く上回る新規メンバーを獲得。いよいよ50名規模の組織に成長を遂げました。これは2年前の同時期と比較して5倍の増加となります。

2つ目はメンバーが社会に対して抱く問題意識を基にして、社会問題にアプローチするいくつかのプロジェクトを導入したことです。

「世界を変える人材を育てる」
この私達の活動目的を果たすために、環境問題や貧困問題など、特定の社会問題を解決する「問題解決型人材」の育成に着手し始めました。

土台を築き上げた当委員会の次なるステップは、いよいよ確かなる「成果」を出すことです。成果とは、単純に海外インターンシップ運営を数多く挙げることでなく、当委員会に関わるメンバー含めた全ての学生の『成長』です。

更なる発展へ向け最大限の努力を致して参りますので、関係者の皆様には引き続きご指導ご鞭撻の程お願い致したく存じます。

平成20年度委員会委員長挨拶

平素よりアイセック関西学院大学委員会に多大なるご支援、ご協力頂きまして誠にありがとうございます。

昨年度は、当団体を構成する会員数の拡大により主幹事業である海外インターンシップ事業に注力して組織基盤を形成することが出来ました。また、メンバー各々が主体的に活動を行うことで様々な人々と出会い今後の人生にとって必ずや役に立つ経験を得ることが出来ました。

このように当団体が一年間の活動を通じてメンバーも組織も成長することが出来たのも、ご支援して頂いた皆様のおかげであると感謝申し上げます。

本来、学生は自立した社会人になるために豊富な時間と自由を使い自らが描く夢に向かって一心不乱に努力する存在ではないでしょうか？しかし、社会に目を向けず将来自分の進むべき道を形成することが出来ない学生や、自分の価値観や考え方を大事にせず表面上の資格やスキルに走る学生が少なからずいるのではないかと日々の学生生活の中で感じることがあります。そのような学生を我々は、決して否定しているのではなく、常に社会人・自立した大人としてのあり方を考えることが大切だと思っております。

そのような中で、我々は当団体の理念である平和な社会を実現するために「将来、国際社会で活躍できる人材」を輩出することを常に目標として掲げております。そのために今年度も海外インターンシップ事業に注力して世界中の学生に成長機会を提供します。

当団体のメンバーは、AIESECや自分自身が社会の構成員であることをしっかりと自覚して、自律自省の精神をもって１人１人が社会に対して主張や考えをぶつけていきたいと思っております。
そして、メンバーも組織も成長できる成果を必ずや残すことをここに誓います。

至らぬ点も多々あるとは存じますが、今後とも等団体へのご指導ご鞭撻の程、宜しくお願い致します。

関西学院大学

法学部　法律学科　3年

三嶋 貴若

平成19年度活動概要

海外研修生受入事業：3件（うち2件は平成20年度から）

Kazi Asifuzzaman／バングラデシュ／North South University 4年 Computer Engineering専攻
インターン先：清水電設工業株式会社
インターン期間：2008年1月～2009年1月
インターン内容：XML・C#・ASPを使用したプログラミング構築

洪 浩（Hao Hong）／中国／中国上海財経大学 4年 経済貿易・日本語専攻
インターン先：株式会社出版文化社
インターン期間：2008年5月～2009年3月
インターン内容：㈱出版文化社のHPを中国語に翻訳、社史作成システムの中国語化

Paul David Bryson／オーストラリア／Flinders University 4年 Corporate Finance専攻
インターン先：株式会社出版文化社
インターン期間：2008年5月～2009年3月
インターン内容：海外のビジネス書を要約、企画出版、和書の英訳

海外研修生送出事業：7件

桑原 周平／関西学院大学 大学院卒
インターン先：メキシコ　GRUPO BIMBO　S.A. DE C.V.
インターン期間：2007年4月～2008年4月
インターン内容：日本への製品プロモーション、対日本企業への営業

瀧本 拓史／関西学院大学 総合政策学部 総合政策学科 4年
インターン先：ドイツ　Sasse
インターン期間：2007年8月～9月
インターン内容：酒造メーカーにて対日本マーケティング

林 幹雄／関西学院大学総合政策学部 4年
インターン先：インド　Prognosys e Services
インターン期間：2007年10月～2008年3月
インターン内容：日本・アメリカ・イギリスのマーケットリサーチ

能勢 知子／大阪外国語大学 4年 中南米地域文化（ポルトガル語）専攻
インターン先：ブラジル　Cineclube Cauim
インターン期間：2007年12月～2008年2月
インターン内容：資金調達のためのリサーチ、CauimのHPを英語に翻訳

安心院 誠／大阪市立大学 商学部4年
インターン先：マレーシア　BUDAYA2008
インターン期間：2008年1月～2008年3月
インターン内容：日本文化の紹介、ファンドレイズ

石井 恵士／関西学院大学 法学部 2年
インターン先：フィンランド　Imogen Business Solutions
インターン期間：2008年2月～2008年3月
インターン内容：オンラインショッピングモールの対日本マーケティング

坂野 晶／関西学院大学 総合政策学部 総合政策学科1年
インターン先：フィリピン　SEE Foundation
インターン期間：2008年2月～2008年3月
インターン内容：Small Micro Entrepreneur 環境NGO活動

海外研修生受入事業活動報告

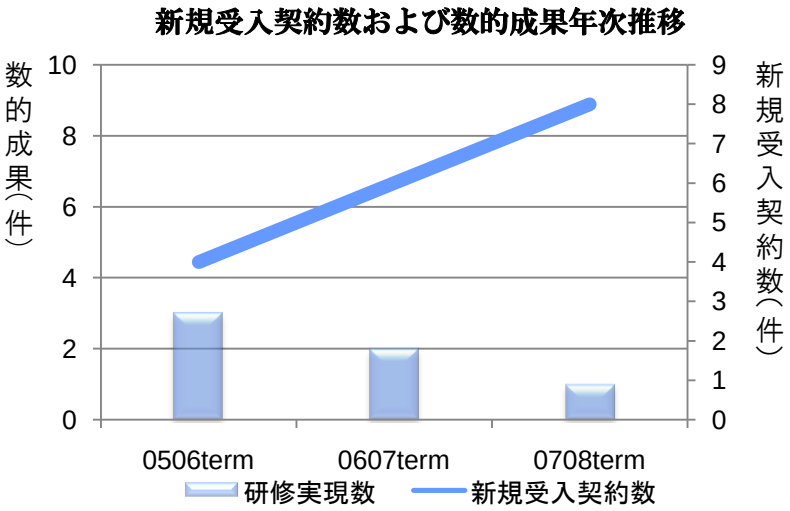
関西学院大学

経済学部　2年

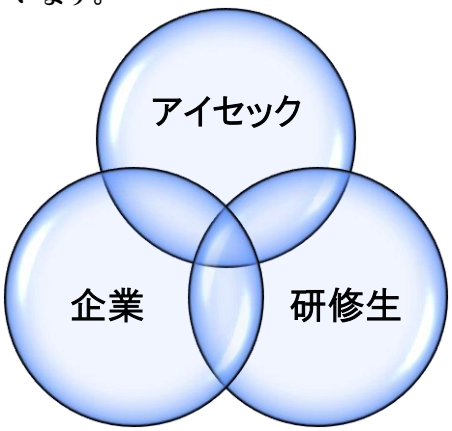
木村まやの

2007年度海外研修生受け入れ事業局局長を努めさせて頂きました、木村まやのと申します。私たちは「アイセック・企業・研修生の3者が学び・気づきを得る研修」を創出することを目標に掲げ、総勢30名弱のメンバーとともに活動してきて参りました。今年度の研修実現数は清水電設工業株式会社様におけるバングラデシュからの研修生Kaziの1件のみと、昨年度に引き続き減少してしまいました。しかし、既存の研修生受入企業様との継続受入契約や再受入契約、さらには5社の新規受入契約を締結させて頂くことができました。その中でも株式会社出版文化社様とは良好な関係を築くことができ、年度変わりの節目に2名の研修生を来日させることができました。

また、今年度は研修生受入企業様からの資金面での援助を頂ける機会が多く、併せてこの場で厚く御礼申し上げます。今後受け入れ局ではプログラムチーム制をとり、メンバーそれぞれの興味や意識・関心に基づいた活動を行っていこうと考えております。これからもご支援・ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。



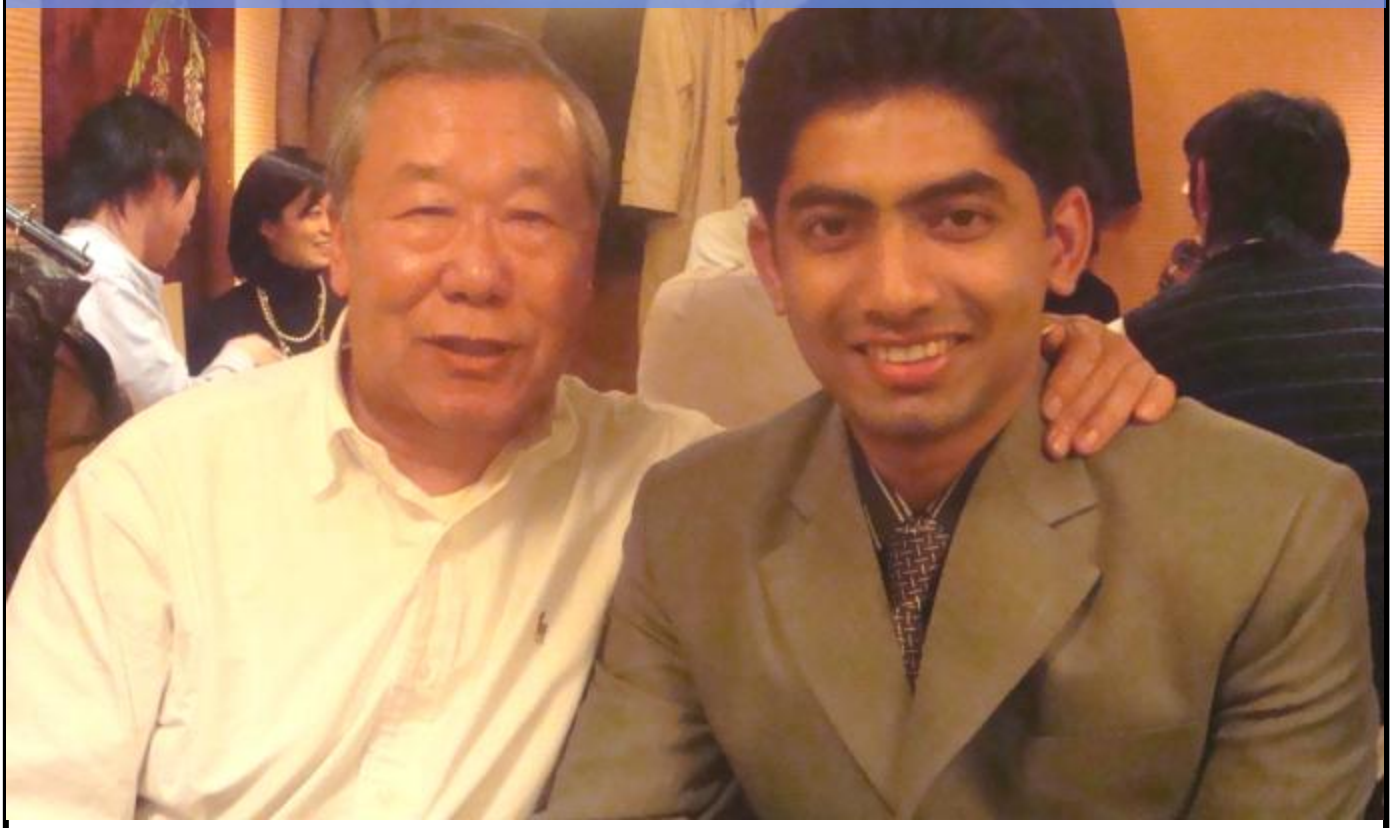
今年度、海外研修生受入事業局においては1件の研修実現と8件の新規受入契約締結を達成することができました。バングラデシュからの男子学生Kaziを受け入れてくださったのは、長きに渡って我々の活動を支援下さっている清水電設工業株式会社様です。よりアイセック・企業様・研修生の3者の関り合いが多くなるような研修創りを目指し、単なる「異文化交流」という枠を超えられるようなレセプションを実施することができました。代表取締役の清水政義様や清水義文様には、我々のイベントやミーティングに数多く参加していただき、研修生にとってもメンバーにとっても学びの多い研修を創っていく先駆けとなったように思います。



また、5月にオーストラリアと中国から来日した研修生、Paulと浩洪の研修はまだ始まったばかりです。彼らの研修が実り多き経験となるよう、局員一同、力を入れていこうと思っております。

アイセックのインターンシップを通じて、研修生が将来社会を変革していくような次世代のグローバルリーダーとなること。そんな壮大な目標を掲げ、活動している私たちメンバーは果たしてそのようなリーダーになることができるのか近年、アイセック・インターナショナルでは研修生だけでなく、メンバー個人個人の社会に対する問題意識に特化した活動をすることが重視され始めてきています。今年度は環境問題・アジア諸国・女性の人権問題など基づいたチームが立ち上がり、次年度も引き続き学びの多い活動を行ってくれることと思います。

Kazi Asifuzzaman（バングラデシュ）



“Only” study is not good enough.

I have decided to join this internship to have an international job experience and explore a new country, culture and society. An international job experience plays a vital role in a students’ career. Internship provides a good opportunity to work in a foreign environment that improves communicational skills of a student. It helps to create the professional level efficiency for a student. All these make a smooth transition of a person’s studentship to a professional career. I always believed that as a student ‘Only’ study is not good enough to achieve a lifetime goal; thus we also need to have other necessary qualities such as leadership skills. I thought that an international internship would be the most perfect opportunity to develop such kind of skills. And a get know a new country and culture is always very exciting to me. I believe joining this internship is one of the best opportunities I have ever had.

I am now working in Shimizu Densetsu Kogyo Co., Ltd as a Trainee. I must say, the working environment, the people of the company are really very nice. I really feel lucky to be a part of this company. In my work area, mostly I learn new IT techniques and apply it for some developments of the company system. I get a lot of support from the company for learning and doing my works. It is going pretty smooth so far. Good for me that I am learning a lot of things very quick. Before this I only had the academic knowledge on a subject matter, now I am having the real practical experience on that. It is really very interesting too.

I would say that to me AIESEC is awesome! All over the world in all the countries all the AIESECers is just part of a same family. We maintain a good relationship with everybody. I already have very good friends in KGLC. They are just not AIESEC members to me but also very good friends.

I have a very good relationship with my boss. He is a wise and nice person. He clearly understands my limitations and situations. I would say we have a very good understanding with each other because we don’t keep any confusion between us. He has been very supportive to me and my works and has contributed a lot for my living in Japan.

「違い」を楽しめ。

Kaziが来日してから、彼と関わることで様々なことを学んだ。その中でも一番大切だと思ったことは、異質なものに対する柔軟性である。

Kaziはバングラデシュから来た。私は一度インドに行ったことがありましたが、彼らの時間のルーズさにあきれた覚えがある。バングラデシュも元はインドであり同じような国民性なので、研修開始当初は、遅刻していないかなど心配なことばかりだった。また、イスラム教の国であるため、彼らの慣習や、食についてもいささか心配ではあった。しかし、研修が始まってすぐに、そんな心配など無用であることがすぐに分かった。彼は”郷に入っては郷に従え”という言葉を知っているかのごとく、すぐに日本の生活に慣れた。彼によると、「日本とバングラデシュは全然違う。でも、それは私に

とって悪いということではない。ただ単に、違うだけだ」と言うのだ。実際に彼は、一人で色々なところに自ら出向き、日本人と関わり、日本の食を楽しみ、日本とバングラデシュの違いを楽しんでいると思う。

彼のそのような柔軟性や積極性は、研修そのものにも生かされているようだ。自ら色々な案を出し、積極的に学ぼうとし、清水政義様・清水義文様からも良い評価を頂いている。清水電設工業㈱様もそんな彼に対し、ビジネスやリーダーシップに対しての新しいアイデアや方向性を教えてくださったり、彼も研修内容そのもの以外にも多くのことを学ばせていただいているようだ。

当委員会のメンバーも清水電設工業㈱様と協働でイベントを開くことによって、様々なことを学ばせていただき、我々もそれを通じて社会に何かを発信できればと考えている。彼の研修はまだまだ続くので、この研修において多くの成長機会を生み出していきたいと思う。

（文・研修生担当　平原 翔太）

今までに無いタイプの研修生。

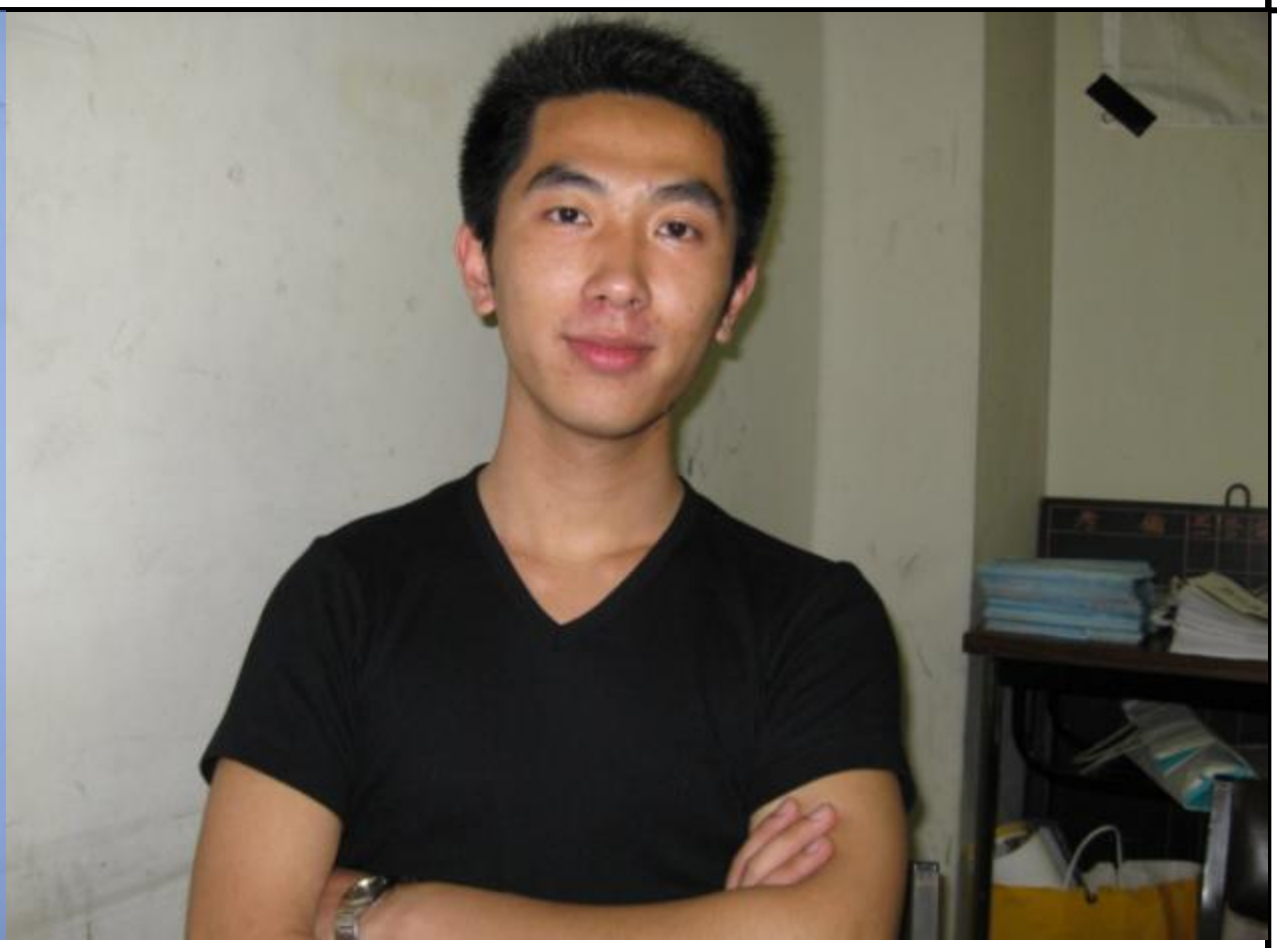
弊社も今回のアイセックからの海外研修生の受け入れが４回目となるのですが、昨年のAndreeaさんに続いてKazi君という他の研修生にも引けを取らない優秀な人材を送って頂きありがとうございます。Kazi君については少し心配になるぐらい好奇心が旺盛な方で、暇さえあれば地図も無しにいろんな所へ繰り出しています。初めは、家の近所だけだったのですが、自転車で隣町へ行ったり電車で梅田に行ったりとどこからその自信が湧いてくるのか分かりませんが、命綱の携帯電話を片手に色々な所を冒険されています。ちなみに未だ一度も完全な迷子にはなっていないようです。今までの研修生と違う所は、日本語への関心も高い所です。今までの研修生は、挨拶程度の言語は覚えて返られる方がほとんどでしたが、Kazi君はもう少し踏み込んで勉強されているようです。

Kazi君は、プログラムの構築技術のベースがしっかり出来ているので少し違った言語でも少しの期間でマスターしていける能力がありました。来日当初にヒアリングを行い、ある程度の技量が有ると判断いたしましたのでワンステップアップして弊社が今現在開発中のプログラムでも使っているXML言語を利用したソフトウェアのEs Terraを使用したプログラミングの開発をしてもらう段取りをしたのですがプログラミングの講師との日程が会わず時間をもてあます期間も有りました。通常２日掛けて行う講習も１日に圧縮して強行して行い、その後は分からない事があれば、自分でネット上から探すもしくは、担当者に積極的に聞き目的を達成すると言う姿勢で物事を進行させています。どうしても、いきなり今のプロジェクトへの参加は難しいので慣れていただく事も含め、弊社の住所録のプログラムをまずは作り直してもらっています。彼の良い所は、常に新しいものに興味があり、彼の得意言語はJAVAなのですが、C言語でプログラムを構築したいと言うことでC言語 + Es Terraで住所録のプログラムを構築してもらいました。その後にC言語で作成したものをWeb仕様に変更してもらっています。このプログラムが終了した後には少しずつ弊社プロジェクトへの参加をお願いしようと考えております。

今後のアイセック様との関わり合いについてですが、最初にフランス人のAnthonyの頃から７年程になりますが色々な国々の方と会話をし、文化に触れ、貴重な体験をさせてもらっていると考えます。今後、受け入れ企業として良い関係を保って行きたいと考えます。

（文・清水電設工業㈱　清水 義文様）

洪 浩（中国）



これが人生だ！を発見したい。

僕は、以下の理由からこのインターンシップに参加したいと思った。

・興味を発見したい
・自分の可能性を広げたい
・会社に迷惑をかけたくない
・スキルをみにつけたい
・これが人生だ！を発見したい！

実際に参加したら、幸せだという感じだ。何でもできない俺が会社に入って、色んな世話になって、なんか罪悪感のような気持ちをもっている。だから、必死に勉強していて、働いている。社員との仲はだんだんよくなった。お昼のとき、ちゃんとしゃべっていたから。株出版文化社の浅田社長様が本当に優しい方だと思っている。何度も“大丈夫か、何か問題はありますか”って聞かれた。僕は中国でバイトしたことがある。だけど、その会社とは全然違っている。出版文化社で一週間研修そすると、「僕は㈱出版文化社に所属しているんだ」と感じた。ここで働くのはうれしい。好きだから。

誰よりも熱い想い。

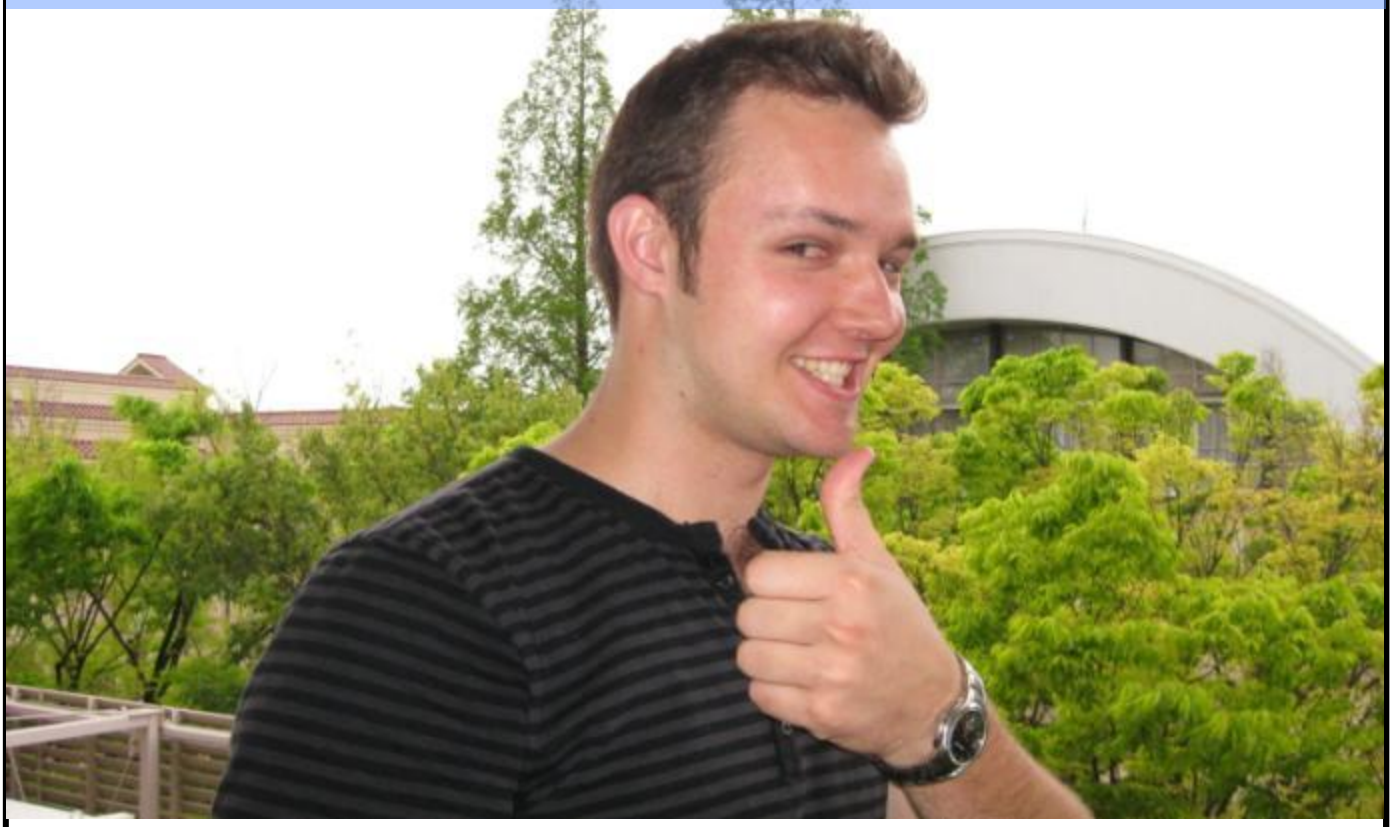
企業様からご要望があった研修生を探すため、私は中国全地域の研修候補生と連絡を取り合った。何十人もの研修生と連絡をとりあっている中に、現在出版文化社様に研修に来てくれている洪浩がいた。彼と約１ヶ月間毎日チャットで話をしている中で感じたのが、彼は、スキル面では他の候補生より劣っており、企業様のご要望とは合致しなかったが、他のどの研修候補生よりも飛びぬけて前向きで、“絶対に出版文化社様に研修に行くんだ！”という熱い想いを誰よりも持っていた。私自身、彼と毎日チャットで話をしている中で、彼の研修への熱い想い、また日本への想いを知り“絶対に彼に研修に来てほしい”と思うようになっていた。なので、彼が1年間㈱出版文化社様で研修をさせて頂けることになって、私自身心から嬉しく思っている。

私は洪浩とこれから1年間関わっていく中で、洪浩から生の中国の情報を知り、今ある自分の中国への固定概念や、偏見を取り除きたいと思っている。日本のメディアを通じて、中国のことについて知ることはできるが、それは必ずしも中国人が本当に考えていることとは限らない。私は洪浩と直接話し、日中問題やチベット問題、ギョーザ事件やその他もろもろの事柄について、生の中国の情報や中国人の考えを知りたいと思う。また、洪浩は日中関係をよくしたいと考えているので、この１年を通じ、少しでも日中相互理解促進を小規模になるかもしれないが果たせたらいいなと思う。そのためにも、日中関係に関するイベントを企画したいと考えている。内容はまだ思案中だが、現段階では、日中両方が抱いている想い・考えを共有し、両方の視点から何が原因なのかを探り、それを共有した上で、解決策をみんなで考えていけるようなイベントにできたらと思っている。

これから１年という、長いようできっと短い期間の中で、洪浩と楽しく且つ学びの多い研修を創造していきたいと思っている。

（文・研修生担当　萬野 琴愛）

Paul David Bryson（オーストラリア）



This whole crazy AIESEC system!

My name's Paul Bryson and I am a trainee working with Shuppan Bunka Sha through KGLC in Osaka. I've had many experiences in and outside of AIESEC but I have to so that perhaps my most profound experience was the one I had as an exchange student in Saitama a few years ago. I was only 17 and spoke no Japanese yet decided to challenge myself by spending a year in a country I was unfamiliar with and force myself to speak a language I had never heard. This experience taught me the value of having experience in a foreign culture, because it's through trying to communicate in foreign cultures that we truly learn how to communicate in any culture, including our own. However attending high school in a foreign country presents an entirely different set of challenges to working in a foreign country and for that reason my international experience has been lacking in fundamental areas.

After my Saitama experience I began University in Adelaide. There I was introduced to AIESEC and immediately the value of the program was obvious to me. In my AIESEC experience I created opportunities for students from overseas to come to Australia and helped Australian students to go overseas on AIESEC internships. However, it was from the first day I joined AIESEC that I was considering my own traineeship options.

When I first began considering traineeships I didn't really want to come to Japan. I'd already lived in Japan and it's a country I love and will always love, but at that point I felt that an experience in a new country would be of most benefit and would provide the most challenges for me to overcome. These challenges ultimately generating the experiences that AIESEC provides. However upon reconsideration I started to consider the realities of a traineeship in a country I had not been to. I had already spent a year in Japan and had only scratched the cultural surface. If I was to spend another year in a foreign land, this time working hard at a company instead of working hard on my language skills, then I would scratch less of the cultural surface in that country than I did in Japan the first time. Ultimately I came to conclusion that Japan provided the best opportunity for me to truly integrate into a social and cultural environment and get the most meaningful experience from my traineeship.

It has already been a month since I landed in Japan and I only really started at the company last week. I'm very glad to be here through KGLC. Their members have been very accommodating and fun to be around. Many of the members remind me of when I was in AIESEC, which sometimes makes me want to drop the traineeship and join the ICX team or run in the next EB election.

With the members of KGLC I feel like there was a family ready-made and waiting for me to get here. All in all I'm very glad to be playing a part in this whole crazy AIESEC system.

海の向こうで待っている研修生

昨年11月にマッチングを開始し、㈱出版文化社様の望む条件というものがどれだけハードルが高いものかということを知った。毎日毎日、メールを何十件送っても一向に返事が来なかったり、やっと返ってきたかと思っても企業様の希望に合わなかったり、かなり困難な日々がずっと続いていたのを覚えている。「それでも探さなければ」という想いから、ほとんど毎日徹夜でマッチング作業を行っていた記憶がある。

そんなある日、当委員会のアイセックメンバーのひとりが私に「これだけ苦労していて、本当にアイセック活動が楽しいの？」と聞いてきた。その質問をされたとたん、なんて答えればいいのかが分からず、しばらく考える時間を設けることにした。

「自分はなんのためにこんなに苦労して研修生を探しているのか」ということをもう一度よく考えてみた。その時点では、すでにおよそ7人ぐらいの候補生が存在していた。

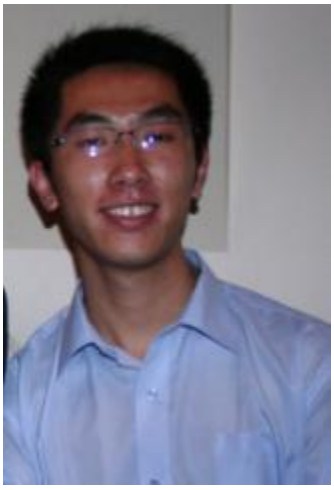
一時的に休憩したあとに気づいたことだが、「これがマッチすれば、数ヶ月後に研修生を前に笑顔で出迎えている自分がいる。」と心のどこかでそう信じていたからこそ、今でもこんなに苦労できるんだと思うようになった。自分の中でやっと整理がついた瞬間だった。

「まだ頑張れる。この7人のうちの誰かの人生を自分が握っているとしたら、自分がここであきらめるわけには絶対にいかないし、私にはこのマッチングを成功させる責任がある」そう思ったから、最後まで絶対にあきらめることはなかった。

結局12月27日、およそ2ヶ月のマッチングを経てようやく、Paul Brysonという研修生とマッチすることができた。

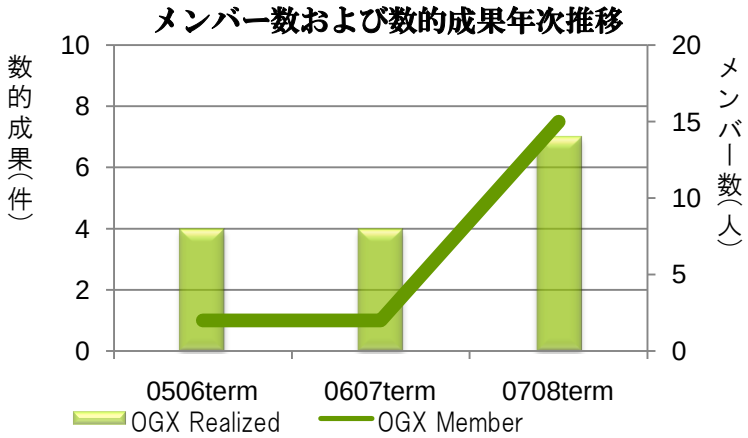
大切なのは、あきらめないことだけじゃないと思う。自分とその先の可能性を信じること、それが一番大切なことだと思う。今回のこのマッチング作業という活動を通して、自分の中で様々な想いが駆け巡り、一度はあきらめてしまいそうな自分がいたことも事実だった。しかし、自分の反応を待っている研修生が海の向こうに存在していること、そしてどんなに辛くても、自分が頑張った末に無事来日が実現したときのあの喜びを、これからマッチング作業を経験することになるであろう後輩たちに、伝えてあげたいと思っている。

（文・研修生担当　上田 彩佳）



海外研修生送出事業活動報告

例年のメンバー数低迷に対してその確保に戦略的に注力することにより、2007年度はポテンシャルの高いメンバーを多数獲得することができました。また、それに伴い一つ一つの研修作りに対して複数名のメンバーを投入でき、より質の高い研修作りを行っていける土壌を整備して参りました。



実現した研修についても、メキシコ･ブラジル･ドイツ･フィンランド･マレーシア･インド･フィリピンと非常に多彩な地域において研修を提供することができ、研修生並びにメンバーにとっても非常に実り多き年度となりました。

また新しい傾向としてメンバーが研修生として研修に参加する比率が非常に高く、他委員会からの受け入れも合わせますと7件中5件の研修がアイセックメンバーによるものとなりました。これはグローバルにおいても加速しつつある傾向であり、アイセックの活動を通じて得た様々な経験を研修で実際に生かすということがメンバーの成長のみならず研修そのものの質の向上にも貢献するとされております。

現在のアイセック・インターナショナルでは、Issue Based eXchangeと呼ばれる、社会に対する問題意識をもってその問題解決にプロジェクトベースで当たる研修が盛んになりつつあります。従来の研修は、研修生個人の問題意識やキャリアアップを目的としたものが多くありましたが、今後はメンバーによる社会への問題意識に基づいた、より学びの質の高い研修作りにシフトしていくものと考えられています。2007年度にはその先駆けとして社会企業家を志すチームが立ち上がり、環境問題にフォーカスしたフィリピンでの研修が実現しました。今後はさらに社会に求められる人材を輩出するべく数的成果のみならず一つ一つの研修の質向上に努めて生きたいと考えております。

関西学院大学
総合政策学部3年

南谷優一郎

2007年度送り出し事業局長を務めさせていただきました、南谷優一郎と申します。我々送り出し局では優秀な人員の獲得とさらなる研修数及び質の向上を目指し、活動して参りました。しかしその過程において、実現した研修を中断して帰国せざるを得ない等、様々なトラブルにも見舞われた多難の年でもありました。

我々は後期よりもう一度基本に立ち返り、「人の成長に関わり、自らも成長させてもらうということ」とはどういうことなのかを全員で再考しました。そうして一人一人の危機管理意識の啓発と堅実な研修運営体制の構築を第一方針として掲げ、その上でより付加価値の高い研修の追及を選択しました。

今後送り出し局は更に多くのメンバーを迎え、より社会とのコネクションを強めながら世界に散在する解決すべき問題に対して将来的に何らかの行動を起こすことのできる優秀な人材の“芽”を育てる活動を加速させていきます。どうかご支援のほどよろしくお願い致します。

石井 恵士（フィンランド）

「経験」と「ホスピタリティ」。

私が今回研修に参加しようと思ったきっかけは３つある。

最初の、かつ最大の理由は、「仕事をする」ということの現実を知りたかったということだ。研修参加を決めたのは2年生の後半、学生生活も折り返しを向かえようという時だった。現在、私は大学3年生である。今年の後半から就職活動がスタートする。社会のことを何も知らずに進むべき道の明確な基準が立てられるだろうか」「このまま社会に出て自分がちゃんとやっていけるのだろうか」という懸念が常に頭にあった。仕事をする、という現実の中で一体自分は何がしたいのか、何ができるのか、それらをただ頭で理解するだけでなく、感覚的に「経験」として身に付けたいと思ったのが事の始まりだ。そして、大学生活残り半分、就職活動の先にある社会人としての日々をより良いものにするためのヒントを得るべく研修参加を決めた。また、以前に1年間アメリカに語学留学をし、日常会話程度の英語は問題ないが、将来は世界中を駆け巡り、多様な価値観・文化・世界を楽しみながら仕事をしたいと思っていたので「英語で仕事をする」ということにチャレンジしてみたいと思っていた。

次に、「どのようにホスピタリティを具現化できるか」というテーマに関する答えを探したかったからだ。私は将来「ワールドワイドなエンターテインメントの分野から人々を幸せにしたい」という夢を持っている。そして私が目指すその企業が持つ「魔法」は、よく「ホスピタリティ」という言葉に置き換えられて語られている。しかしながら、それは目に見えないものであり、なんとなく大事だとわかっていても実際に何をすれば、どうすればそれを具現化できるのかわからないのが自身の現状。ゆえに実際に仕事を通して自分なりの、ホスピタリティを具現化するアプローチを見つけようと思った。

最後の理由は上記２つの理由とは少し性質が異なる。今までのものは全て自分の将来のために、という個人ベースの参加理由であったが、これは「アイセック」という組織に重きを置いたものである。「eXchange（アイセックが創る海外インターンシップ）の可能性を経験し、今後当委員会の活動に活かせるものを持って帰りたい」というのが最後の理由だ。私は大学入学時からずっと当委員会のメンバーとして活動してきた。特に私は、受入事業局に属していたので、企業に訪問してはアイセックを紹介し、海外からの研修生受入のお願いをしていた。そこで自分が強く思ったことが「自分が海外インターンシップを知らないのになぜ人に薦めることができるのだろう、自分の言葉に説得力があるのだろうか…」ということだ。そこでまずはメンバーである自分が、自分たち（アイセック）のメインプロダクトを知るべきだ、と思い研修に参加した。

「責任」の重さを痛感した。

今回の研修を通して実に多くを学び、とても良い刺激を自身に与えることができたと思う。特に、日常生活を一層大事にするようになったと思う。まず「主体性が磨かれた」。私はどちらかというと普段から積極的な方だが、この研修でさらにレベルが上がったように感じる。オフィスで仕事をする、という初めての経験の中でわからないことも多々あったが、躊躇うことなく質問を投げかけ、少しずつでも問題を解決していく、そのプロセスを通して自分で色んなことができ

るようになっていった。具体的には、オンラインショッピングモールの日本版を作る過程の中で、翻訳作業や日本のインターネット事情に関する統計や情報の収集、テナントとなりうる企業を業種ごとにリストアップする、それらをもとに日本進出のための簡単な戦略を立てる、といったことをしていた。実際に経験し、目に見える形で結果を少しずつ出していく、そこからまたやる気が出て次につながる。こんな当たり前の、しかし社会に出たときにとても大事なことを、身をもって知れたということは非常に大きな収穫であった。また、この経験から「責任」の重さを痛感することができた。物事を的確に捉え、より効率よく、より良い成果を出すための思考をし、計画を立て実行していく。そういったマネジメントスキルを向上させられたと思うし、故に自分がしないといけないことやできることを最後までしっかりとやり通す精神とスキルが身に付いたと思う。その面からも「日常生活を大事にする＝日常のことをしっかり行う＝「当たり前」のレベルを向上させていく」ことが今回の収穫でもっとも大きなものだと言える。

さらに、今回の研修では企業での活動のみならず、様々な付加価値を加えていくことができた。特に述べたいのは渡航前に行った企業の方とのラーニングセミナーと当委員会のメンバーが企画、実行した教育スタディーツアーである。前者は、株式会社オリエンタルランドの方をゲストにホスピタリティとは何なのか、どうすればそれを行動で具現化できるのか」ということをコンセプトにセミナーを実施した。当委員会において、直接外部の方を巻き込んだ研修創りとしてのファーストケースとなった。後者のスタディーツアーに関しては、教育先進国であるフィンランドの小学校から大学までを訪問し、授業見学や先生にインタビューなどを行った。企業内にとどまらずフィンランドという国の制度や文化、生活全体から学びを得ることができた。

「やってみるもんだなぁ」。

研修中に最も大変だったことは、ビジネスの世界の理想と現実のギャップを直視したことである。先述した通り私は大学入学時よりアイセックメンバーとして活動していた。そのため、「社会」というものに注目する機会が多々あった。また、近年企業が社会貢献を積極的に行う動きがよく見られ、何かしら自身の研修先においても社会に目を向けた活動があると思っていた。実際は、私の研修先はできたばかりのITベンチャー企業で、そこで働く人ひとりひとりはとても親切でおもしろい人たちばかりで今でも皆のことが好きなのだが、組織としては「とりあえず会社を安定させよう、利益を出そう」という雰囲気が先行し、研修開始時のインストラクションは日本企業ほどしっかりしたものでは無かった。また、どんなにがんばっても日本の制度的に達成できないことを要求されたこともあった。できたばかりの会社であるが故に体制が安定しておらず、矛盾している点や非効率な点も多かった。しかし、問題点を指摘し、どうすればいいのかを学生の拙い意見ではありながら思い切って提案し、それを会議の議案に挙げて皆で話し合った時は「やってみるもんだなぁ」と喜びを感じた。

「当たり前」のレベルの向上。

なぜアイセックなのか、それは世界100以上の国と地域に存在するグローバルで多様な色が交差する団体でありながら、皆で一つのものを目指しているという点がとてつもなく魅力的だからだ。実際に研修中も、私自身がアイセックメンバーであるため、現地のメンバーと共通の話題で会話を広げることができたり、海外インターンシップ作りにおいてアイデアを交換しあえたりと、出逢った瞬間から繋がっているものを見出すことができ、この上ない友達関係を築くことができた。特に印象に残っているのは日本とフィンランド、お互いの国の社会問題について真面目な議論をしたことだ。

なぜインターンなのか、それは「未来の日常生活」を経験できることに意味があると思う。海外インターンシップと聞くと何かとても特別なもののように聞こえるが、朝起きて仕事をしてご飯を作って洗濯して…と、実際はいたって普通の生活を送るのだ。「海外」という点のみ少し違う。そんな中でいかに自分の環境を受け止め、考え、動き、自分の生活をよりよくしていくか。それを実際に経験し、行動することで間接的に「何かを達成したいときにどうすれば達成できるかを考え自ら動いていくチカラ」を身に付けるものがアイセックの海外インターンシップだ。アイセックの目指す「社会を変革する人」とはまさに「自分や人の日常とそれを取り巻く周囲を良い方向に変えていける人」のことを指していて、そういう人になるためのチカラをアイセックの海外インターンシップで鍛えられるのだと思う。

今後は研修参加の理由のひとつである「当委員会にeXchangeの可能性を伝え、今後の活動に活かす」ことを達成したい。そのためにも残りのアイセック生活をより積極的に楽しみ、より多くのリーダー的役割を担っていこうと思う。大学生活においては何よりも「当たり前のこと、日常のことをしっかり行う」そして「自身の日常を向上させる、もうひとつ上のレベルを自身の当たり前にする」という目標のもと過ごしていきたい。具体的には「ゴミの分別をちゃんとする」「マイ箸を持つ」ということを義務的にするのではなく自身にとっての「当たり前」までもっていくということだ。そして、長期的には、「ワールドワイドなエンターテインメントの分野から人々を幸せにする」という夢の達成のために語学力の確立、専門知識の習得、リーダーシップの練磨を中心に、何よりも自ら主体的に動いていこうと思っている。

坂野 晶（フィリピン）

「現場」へ行きたかった。

研修に行こうと思ったきっかけは二つある。一つは私自身がアイセックで送り出し局のメンバーをしており、自分自身が経験してこそ、人の研修づくりを本気で価値あるものに出来ると思ったから。学生時代に海外で2ヶ月以上働くということは、その人の人生を変えうる、物凄く大きな意味をもつ経験だと思うからこそ、自分自身がその経験を語れる人になりたいと考えたのである。

もう一つは、どうしても「現場」に行きたかったから。小学生の時に「カカポ」という絶滅危惧種のオウムに惚れ込んで以来、自分の人生のテーマは「環境問題解決に取り組むこと」だと決めていた。しかし、私は環境問題が直接目に見える形で影響を与えている、もしくは環境問題解決に直接取り組んでいる場を経験したことがなく、すでにそういう場に飛び出して行っている同年代の経験を聞くたびに、頭で考えるだけでは意味が無いのでは、と引け目を感じることが幾度かあった。そのため、どうしても実際何かしらのアプローチを行っている現場で、自分の目で見て、手で触れて、匂いを嗅いで、その場を経験したい、と考えていた。その「現場」を経験できる機会が、今回の研修だと思った。

この2ヶ月の研修を通して私に最も影響を与えたのが、スラムでSME(Small Micro Entrepreneurs：自分たちの家族の生活を支えるために小さなビジネスを経営する人たち)の家庭にホームステイした経験である。今回の研修は同じProgramに世界中から集まった4人の研修生が参加しておりその4人がそれぞれ1つの家庭に入った。ビジネスをしているのはほとんどが女性で、多くはシングルマザーである。彼女たちから、また彼女たちと生活を共にし、そのビジネスに向き合う中で、本当に多くを学んだ。

その中で大きなテーマとなったのは、「社会」起業家とは、「貧困」とは何か、 ビジネスは貧困解決への有効な手段となり得るか、何を彼らは必要としているのか、などである。今まで、様々な社会問題、その原因、それらの解決の難しさなど、知識としてはわかっていたと思う。しかし、それらが実際にどんな意味を持つのか、本当にその問題に直面して生きている人たちがいて、彼らが何を想い、どうやって日々暮らしているのかを目の当たりにし、自らが経験する。それにより、自分が何かを考える際に、どういう視点が必要で、何を考えるべきかが見えてきたり、毎日を「暮らす」ことの意味、例えば自分にとって、人にとって、何が大切なのか、何を背負って生きているのか、などがより現実味をもち、自分に迫ってくる。

本当に死ぬかもしれない。

研修中で辛かったことは大きく二つ。一つは、フィリピン到着2日後に原因不明の病気になったこと。真冬の日本から、熱帯灼熱のフィリピンへといきなり環境が変化し、身体がついていかなかったためかもしれない。夕方突然の腹痛に立っていられず、全身の寒気で顎が勝手にガクガク動き、夜中には高熱が出て一晩苦しんだ。翌日現地のアイセックメンバーに体温計を持ってきてもらうと、40度。本当に死ぬかも知れないと思った。まだ研修自体も始まっておらず、一緒に研修を行い、一緒に2ヶ月間暮らした他の3人の研修生も

まだ到着しておらず、「なぜ私は日本での活動を放り出してまで今ここにいるんだろう」と精神的にもどん底だった。

その後、病院にも行き、海外の病院で恐いながらも注射をしてもらい、薬も買って、徐々に回復していった。最初がどん底からのスタートだったため、研修中は常に全体として上り調子になったことは良かったことだと言える。

もう一つは、スラムでのホームステイとリサーチの際に、研修生4人みなが抱えた葛藤である。自分たち家族の生活を支えるために、小さなビジネスをしているSMEの家庭に入り、家族の一員として彼女たちと、彼女たちのビジネスと向き合って、心の底からそのビジネスをより持続的に、その生

活をより良くしたいと願ったとしても、じゃぁ私たちには何ができるのか、という問いが生まれるからである。たった2ヶ月間では何も出来ないだろう。ビジネスを助けられるようなスキルなんて無い。でも、何かを残したい。そんな想いから生まれたものだった。

結果として私たちは今後、ESADF (Entrepreneurs School of Asia Development Foundation) がこれから長期的に行っていくCommunity Developmentのために、SME側からの視点を残し、かつSMEには、分断されかけていたり、繋がりが薄くなっていたりした「家族の絆」や「家族を愛すること、向き合うこと、感謝すること」の大切さを残せたのではないかと考えている。これらが今後どのように活かされるか、私たちはその成果指標を持たない。しかし、一度関わった彼らに、これからも関わり続けることが私たちの義務でもあるとは思っている。

その場で暮らす人と同じように。

前述したような「現場」を経験するためには、その場で暮らす人と同じように「仕事をする・暮らす」ことが何よりも適切な方法だと考えている。確かに、その場に行き、現状を見るためだけなら、旅行や他の手段でも可能かもしれない。しかし、本当に何が起こっているのか、何が問題なのか、私たちに何が出来るのかなど、「本当の現場」を知り、自分なりに考えるためには、その場で生活し、その場で仕事をすることが必要だと考える。

私は大学入学前から、大学では絶対に長期留学はしないと決めていた。本当に自分が学びたい専門を勉強しようと思ったら、基本的な知識が無ければ海外では太刀打ちできない。日本人は外国では、そもそもの専門用語を知るだけで格闘しなければならないからである。高校時代1年間ニュージーランドに留学し、生物の授業でそれを身にしみて経験したから言えることだ。これも短期間のインターンシップを選んだ一つの理由となった。

ではなぜアイセックを選んだかというと、活動する上で、まず単純に私がスゴイと思える先輩方がいて、自分がデザインしたチームで一緒に活動してくれる仲間がいたからである。そこで自分の理想を掲げて、将来こういう人になりたい、そのために学生時代に出来ることは何かを考え、デザインした研修があるのであれば、その研修を最初に経験するのは私自身であるべきだと考えた。だからこそ、アイセックで、自分自身も研修に参加しようと決断できたのだと思う。

自分の「夢」をカタチにする。

これからの私にとっての課題は、この研修での経験をどう還元するか、である。現地で関わった人たちに直接何かを返すことが出来れば一番良いのだろう。しかし、私には今すぐその「何か」を行う力は無い。だからこそ、その方法を探ることが一つ。

また、何かを還元する際に、その対象は必ずしも直接私が何かを与えてもらった相手でなくてもいいのだとも思う。自分がどこからか得たものを使い、自分なりに何かを創り出し、またどこかへそれを渡していく。そうやって、少しずつ小さくとも世界が回っていけば、それが還元することになるのではないだろうか。そのために、今まで自分が追いかけてきた夢を自分なりにカタチにすること、それがもう一つ。その夢をカタチにする際に大切にすべきこと、見なくてはならない、考えなくてはならないものをこの研修を通して学び、今度はそれを実践する過程に足を踏み入れた。ここから何をどれだけ出来るか、やっていくか、真価が問われる。

平成19年度決算報告

関西学院大学

総合政策学部　2年

原田 祐果

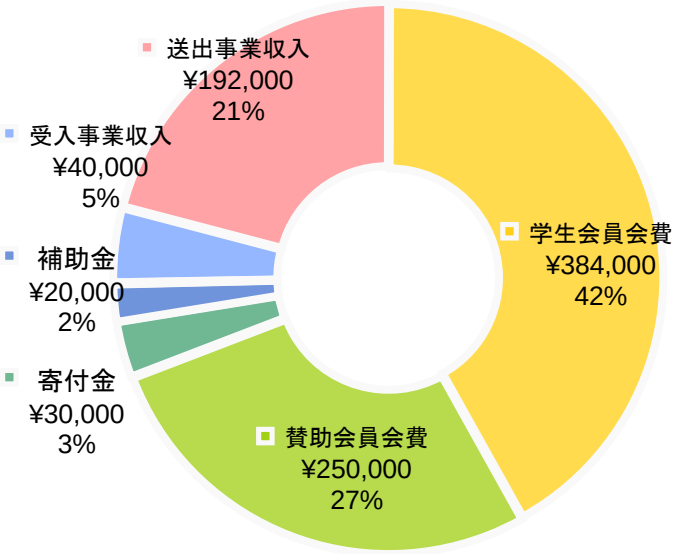
2007年度は対前年度比で収入に非常に大きな伸びのある1年となりました。収入は対前年度比で約1.5倍、金額に換算すると前年度を約300,000円上回る収入となりました。

収入増加の主な理由は大きく3点あり、新規賛助・寄付金会員様の急増、学生会員増加に伴う徴収会費総額の増加、送り出し事業安定に伴う収入増加が挙げられます。中でも一番の要因となりましたのは、新規賛助・寄付金会員様といった、財政面へサポートを頂戴しておりますパートナー様の増加です。既存の賛助会員様2社に加え、今年度は3社の新規賛助会員様と、1社の寄付金会員様から心強い御賛助を頂戴し、例年の課題であった収入の増額と安定化を図ることに成功致しました。

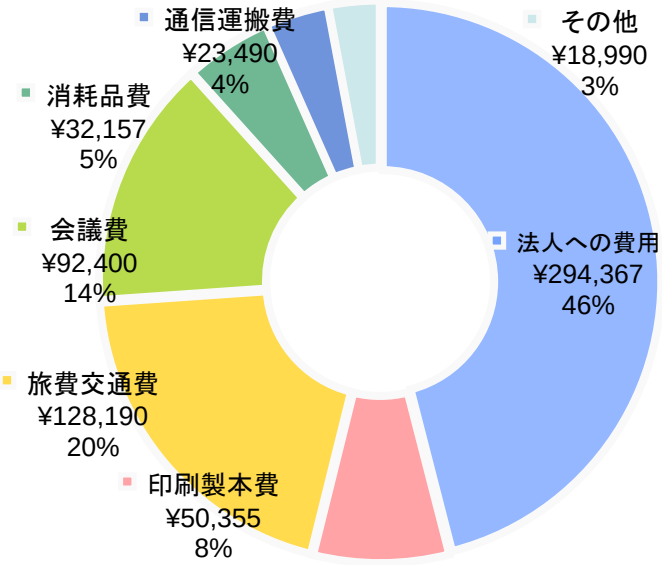
また、委員会財政破綻の危機に備える為、今年度の収入の一部を定期預金化し、委員会財政の基礎をより強固なものへと致しました。様々な危機に備えるには、決して十分といえる金額ではないものの、着実に委員会の財政も安定化に向かっております。

支出に至りましては、前年度から多少の減額と大幅な変化は見られませんでした。しかし、2008年度には現在35名会員に新入生を迎え、約50名程度の会員規模となることが予測されており、大幅な会員増加に伴う支出増加が見込まれております。先程収入は例年に比べ安定化しつつあると申し上げ、次項のグラフをご参照のとおり事業収入も、少しずつ増加傾向にあります。しかしながら委員会の支出を賄うほどの規模ではなく、必要経費の一部を会員会費や自己負担に頼っております。また、2008年度より新制度が導入され、事業委託費の減額が施行されるなど、財政状況はさらに厳しくなり、委員会規模拡大に財政基盤が追い付いていないのが現状でございます。本誌をご覧いただいております皆様には、継続してまた新たなパートナーシップの締結をご検討頂ければ幸甚です。

2007年度　収入の部



2007年度　支出の部



平成十九年度 関西学院大学委員会
委員会会計 財務決算報告

貸借対照表

平成20年3月31日現在　　（単位:円）

借方科目	金 額	貸方科目	金 額
現金		預り金	
普通預金	532,177	借入金	
定期預金		法人からの借入金	
有価証券		現金過不足	
立替金		源泉不明金	
法人への貸付金			
電話加入権			
保証金		負債合計	
基本金引当預金	100,000	正味財産額	782,177
基本金引当投資有価証券		(うち基本金)	100,000
積立金引当預金	150,000	(うち積立金)	150,000
積立金引当投資有価証券		(うち企画準備金)	
使途不明金		(うち当期正味財産増減額)	276,951
資産合計	782,177	正味財産合計	782,177
借方合計	782,177	貸方合計	782,177

KG 財務決算報告(貸借対照表)

収支計算書

（単位:円）

自:平成19年4月1日　至:平成20年3月31日

項　目	決算額	予算額	増減
1. 収入の部			
海外研修生受入事業委託収入	40,000	40,000	
海外研修生送出事業委託収入	192,000	144,000	48,000
学生会員会費収入	384,000	291,500	92,500
賛助会員会費収入	250,000	100,000	150,000
寄付金収入	30,000		30,000
補助金等収入	20,000	20,000	
企画賛助収入			
広告賛助収入			
法人からの収入			
基本金引当預金取崩収入			
基本金引当投資有価証券売却収入			
積立金引当預金取崩収入			
積立金引当投資有価証券売却収入			
電話加入権売却収入			
保証金戻り収入			
基本財産運用収入		50	▲ 50
雑収入	900		900
当期収入合計	916,900	595,550	321,350
前期繰越収支差額	255,226	255,226	
収入合計	1,172,126	850,776	321,350

収支計算書

（単位:円）

自:平成19年4月1日　至:平成20年3月31日

項　目	決算額	予算額	増減
2. 支出の部			
印刷製本費	18,040	20,000	▲1,960
旅費交通費	128,190	206,740	▲78,550
施設使用料	6,000	3,000	3,000
会議費	92,400	94,400	▲2,000
委託費	32,315	30,000	2,315
諸謝金	8,100	4,000	4,100
飲食費			
宿泊費			
消耗品費	32,157	23,630	8,527
什器備品費			
書籍雑誌費			
通信運搬費	23,490	60,030	▲36,540
光熱水料費			
賃借料			
保険料			
会員加盟費			
年会費	100,000	100,000	
法人への維持管理費用負担金費用	194,367	162,240	32,127
法人へのその他の費用			
電話加入権購入支出			
保証金支払支出			
基本金引当預金積立支出			
基本金引当投資有価証券購入支出			
積立金引当預金積立支出			
積立金引当投資有価証券購入支出			
支払手数料	4,830	1,995	2,835
雑費	60		60
当期支出合計	639,949	706,035	▲66,086
当期収支差額	276,951	▲110,485	387,436
次期繰越収支差額	532,177	144,741	387,436

賛助企業一覧

（五十音順、敬称略）

Arrow Field	株式会社アローフィールド http://www.dainichikasei.co.jp/
SEAVAC	清水電設工業株式会社 http://www.seavac.co.jp/
JM JAPAN MATERIAL	ジャパンマテリアル株式会社 http://www.j-material.jp/jm_top.htm
株式会社出版文化社	株式会社出版文化社 http://www.shuppanbunka.com/
	株式会社大日化成 http://www.dainichikasei.co.jp/
CEW	株式会社中央電器計器製作所 http://www.e-cew.co.jp/index.html
NAMIKEN	浪華絹綿株式会社 http://www.namiken.co.jp/

アイセック関西学院大学委員会

特定非営利活動法人アイセック･ジャパン

会員団体　アイセック関西学院大学委員会

〒662-8501

兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155

関西学院大学新学生会館内

URL ; http://www.aiesec.jp/kg

E-mail ; kwansei_gakuin@aiesec.jp

委員会理事

藤沢　武史　　関西学院大学商学部教授

松村　寛一郎　関西学院大学総合政策学部メディア情報学科准教授

委員会執行役員一覧

（上段左から　金澤、三嶋、杉浦、坂野

下段左から　木村、原田、中谷）

2007年度

委員長		中西　和博（関西学院大学商学部3年）
副委員長	兼　研修担当	南谷　優一郎（関西学院大学総合政策学部3年）
副委員長	兼　渉外担当	松井　敏喜（関西学院大学経済学部3年）
副委員長	兼　総務担当	谷本　由紀（関西学院大学経済学部3年）
財務担当		原田　祐果（関西学院大学総合政策学部2年）
研修担当		木村　まやの（関西学院大学経済学部2年）
研修担当		三嶋　貴若（関西学院大学法学部2年）

2008年度

委員長		三嶋　貴若（関西学院大学法学部3年）
副委員長	兼　研修担当	杉浦　望（関西学院大学総合政策学部3年）
副委員長	兼　渉外担当	金澤　一生（関西学院大学商学部3年）
総務担当		木村　まやの（関西学院大学経済学部3年）
財務担当		坂野　晶（関西学院大学総合政策学部2年）
渉外担当		原田　祐果（関西学院大学総合政策学部3年）
渉外担当		中谷　勇輝（関西学院大学総合政策学部3年）

アイセック関西学院大学委員会　平成十九年度年次活動報告書

発行日　2008年6月20日
発行団体　特定非営利活動法人アイセック・ジャパン
会員団体　アイセック関西学院大学委員会
〒662-8501
兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155
関西学院大学新学生会館内
発行責任者　平成20年度　委員長
三嶋　貴若（関西学院大学法学部3年）
編集者　平成20年度　総務担当
木村　まやの（関西学院大学経済学部3年）